

ツヤクロマルカスミカメの近畿地方における記録と寄主植物

植田 義輔¹⁾

はじめに

ツヤクロマルカスミカメ *Strongylocoris leucocephalus* は、旧北区と北アフリカに分布するカスミカメムシ科のカメムシで、日本では北海道と本州の中部以北に分布している(安永・高井・中谷, 2001; 安永・山田・石川, 2016). 本種の寄主植物は、ロシアではキキョウ科のホタルブクロ類 *Campanula* spp. とされているが(安永・高井・中谷, 2001), 日本の中部地方(菅平高原)では、ヤマホタルブクロ *Campanula punctata* var. *hondoensis* を寄主植物として利用しておらず、同所的に生育しているツリガネニンジン *Adenophora triphylla* var. *japonica* だけを利用している(Takagi, 2014).

筆者は近畿地方の3地点においてツヤクロマルカスミカメを確認したが、本種の近畿地方における分布記録および寄主植物の記録は無いと思われるので報告する。

ツヤクロマルカスミカメの近畿地方における記録と 生息環境

ツヤクロマルカスミカメが確認されたのは、以下の3地点である。

地点①：大阪府枚方市尊延寺(標高約130m).

採集データ：1ex., 5 VI 2017.

地点②：兵庫県豊岡市日高町栗栖野[神鍋高原](標高約350m).

採集データ：2exs., 4 VI 2016; 4exs., 28 V 2017; 8exs., 12 VI 2017.

地点③：兵庫県養父市大久保[鉢伏高原](標高約870m).

採集データ：4exs., 16 VII 2017; 3exs., 3 VI 2018.

いずれも筆者採集・伊丹市昆虫館保管(予定)

生息環境は、3地点ともツリガネニンジンが生育している陽当たりのよい乾性草地である。

地点①の生息地は、耕作地の畦畔の斜面に成立する草本群落である。この群落は、ヨモギ・ゼンマイ・ワレモコウ・スギナが優占し、他にススキ・コウゾリナ・セイタカアワダチソウ・ノアザミ・ナワシロイチゴ・カンサイタンポポなどが生育している(図1a).

地点②の生息地は、遊歩道脇の斜面に成立する草本群落である。この群落は、ススキ・ヤマハッカが優占し、他にワラビ・ヨモギ・コウゾリナ・ナワシロイチゴ・ヒメジョオン・クズ・オカトラノオ・ミツバツチグリなどが生育している(図1b).

地点③の生息地は、スキー場のゲレンデ脇の荒地地状の草本群落である。この群落は、ススキ・オオブタクサ・コヌカグサ・ヨモギ・イタドリ等の草本がパッチ状に生育し、それ以外の場所は、ウツボグサ・ヘラオオバコ・シロツメクサ・ハルガヤなど丈の低い草本が生育している箇所と、植生の無い裸地になっている箇所がある(図1c).



図1 ツヤクロマルカスミカメの生息環境。a, 地点①(尊延寺)2016年5月23日; b, 地点②(神鍋高原)2016年6月4日; c, 地点③(鉢伏高原)2017年7月16日。

¹⁾ Yoshisuke UEDA 大阪府枚方市

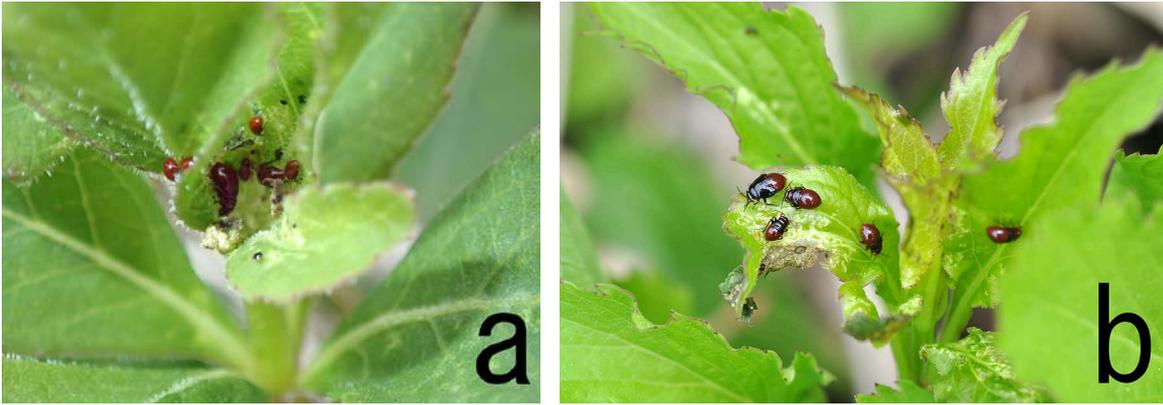


図2 ツリガネニンジンを吸汁する幼虫(神鍋高原). a, 若齢幼虫を含む集団(2019年4月23日); b, 終齢幼虫を含む集団(2017年5月17日).



図3 ツリガネニンジンの葉を吸汁する成虫(神鍋高原)2016年6月4日.



図4 ツリガネニンジンに生じた吸汁痕(神鍋高原)2016年6月4日.

ツヤクロマルカスミカメの近畿地方における寄主植物

地点①・②においては、成虫の他に幼虫も確認された。この2地点では、若齢から終齢の幼虫が、ツリガネニンジンから吸汁していることが観察された(図2a, b)。したがって、近畿地方においても、ツリガネニンジンが本種の寄主植物になっていることが確認された。幼虫の寄生部位は、ツリガネニンジンの茎頂部付近の柔らかい葉であった。

成虫についても、吸汁が確認された植物は、地点①・②・③のいずれの地点においても、ツリガネニンジンであった。成虫の寄生部位は、茎頂部付近の葉だけでなく、それよりも茎の下方にある、生長してやや硬くなった葉からも吸汁することが観察された(図3)。

カスミカメムシ科のカメムシは植食性の種であっても、動物性の餌を吸汁しないと幼虫は生育できないことが多い(安永・高井・中谷, 2001)。しかし、本種の幼虫については、筆者が観察した限りでは、他の昆虫類など動物質の餌を吸汁している様子は確認できなかった。そのため、本種は専らツリガネニンジンから吸汁して発育している可能性があると考えられる。

ツリガネニンジンに生じた吸汁痕の形状

ツヤクロマルカスミカメの吸汁によってツリガネニンジンに生じた吸汁痕を図4に示した。茎頂部付近の葉が吸汁を受けると、葉に縮れが生じ、茎の先端部が枯死する例が多数観察された。一方、生長した葉が吸汁を受けると、葉全体が縮れることは少ないが、葉の表面に多数の微小な白斑が生じることが観察された。

謝辞

ツヤクロマルカスミカメの同定を確認して頂き、報告を勧めて下さった長島聖大氏(伊丹市昆虫館)および一部の現地調査に同行して頂いた近藤伸一氏(朝来市)に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- Takagi E., 2014. Herbivory by *Strongylocoris leucocephalus* (Hemiptera: Miridae) on a novel host plant *Adenophora triphylla* var. *japonica* in Japan. *Journal of Asia-Pacific Entomology*, 17: 499-503.
 安永智秀・高井幹夫・中谷至伸, 2001. 日本原色カメムシ図鑑－陸生カメムシ類 Terrestrial

Heteropterans –第2巻 (安永智秀・高井幹夫・川澤哲夫 編). 350pp. 全国農村教育協会, 東京.

安永智秀・山田量崇・石川 忠, 2016. Family Miridae
カスミカメムシ科. 林 正美・友国雅章・吉澤和
徳・石川 忠 (日本昆虫目録編集委員会) 編, 日本
昆虫目録 第4巻 準新翅類, pp.376-421. 日本
昆虫学会・權歌書房, 福岡.

米倉浩司・梶田 忠, 2003 –. BG Plants 和名–学名
インデックス (YList) (<http://ylist.info>) [2020年
4月23日アクセス]